

Tokyo人

事務所の壁に、若い女性が弾けるような笑顔を見せるパネル写真が飾られている。写真の下には女性の手書きで「POSITIVE THINKING(ポジティブ・シンキング)!!」の文字。

アートディレクター 水谷孝次さん

「日本の将来はこの子たちが握っているかもしれない」。撮影した若者たちの写真を前に語る水谷さん
港区六本木の事務所



■みずたに・こうじ アートディレクター。昭和26年生まれ。ニューヨークADC国際展金賞(平成6年)、ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ金賞(同8年)など受賞。最近ではプロ野球ダイエーホークスのロゴをはじめとするCIデザイン、森永ウィダーインゼリーのパッケージデザインなどを手がける。30日午後2時から、港区の汐留カレッタでメリーな笑顔の撮影会を行う。

「21世紀型の幸せ」求め活動

企業や自治体が後援・協賛したイベント「グレート・トウキョウ・フェスティバル(GTF)」で、原宿などで撮影した千人近い若者の笑顔と直筆のメッセージを、六本木ヒルズメ

ロハットなどに飾った。「九十年代の失われた十年の後、二十一世紀は笑顔の世紀だと思ったんです」。きっかけは阪神大震災だった。神戸・新長田南地区の再建現場の柵に、人々の笑顔の写真を張り出した。

お年寄りの被災者から、「あの通りを歩くと元気が出る」と言われた。「負の部分を負った町を笑顔で明るくしたい」。米中核同時テロから一年後の

ニューヨークでも、人々の顔を撮り続けた。撮影では、事件後ふさぎ込んで路上生活をしていた少女が、プロジェクトに共感し、次々と友達を紹介してくれた。いつしか彼女はスタッフの一員になった。

「お金はもう要らない、というくらい入ってきたが、すんなり行く仕事はなかった」とジレンマを抱えた。企業の仕事を減らした今、収入も減ったが、メリ

は美術館ではなく、六本木ヒルズや日比谷公会堂など、公共の場所を選んだ。昭和五十二年から、企業の広告やCIをデザインしてきた。空前のバブル景気でも、クライアントの思惑に左右される日々。

「お金はもう要らない、というくらい入ってきたが、すんなり行く仕事はなかった」とジレンマを抱えた。企業の仕事を減らした今、収入も減ったが、メリ

「ひと昔前なら、ボランティアで四十人集めることは大変でした。今は、みんな何か人のためになることをしたいんですね」

「ひと昔前なら、ボランティアで四十人集めることは大変でした。今は、みんな何か人のためになることをしたいんですね」

「九月七日、再びゴミ拾いプロジェクトを行う。十一月には五百人体制で行うことになっている。「メリー」をアートとしてだけでなく、社会にとりこみたい」人を幸せにする活動が、経済活動として成り立つような社会にしたい。それがライフワークだという。(豊川雄之)